

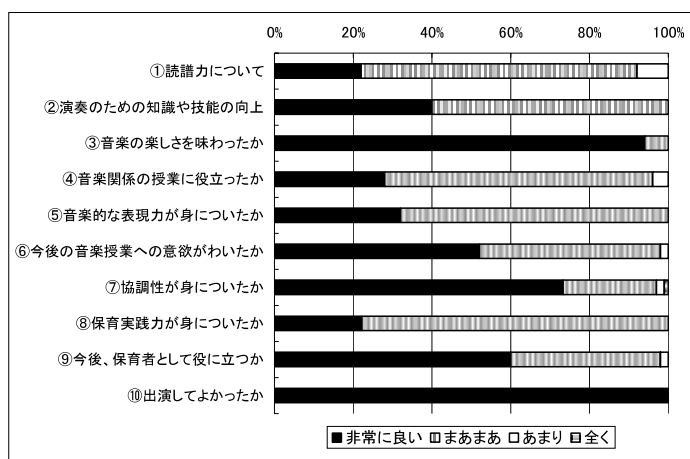
3. 調査方法

- (1)調査対象者 : 学生音楽祭出演者
- (2)配付・回収方法 : 学生音楽祭の舞台発表終了後に任意の記載および同時回収
- (3)回収数 : 100枚
- (4)アンケート記載方法 : 4段階尺度による選択と自由記述を併用

4. 結果と考察

質問項目及び集計結果は、以下の表1の通りである。

表1. 学生音楽祭出演者調査項目・結果



(1)読譜力について

「楽譜を読む力がついたか」では、「非常に良かった」22.0%、「まあまあ」70.0%、「あまり」8.0%であり、「全く」力がつかなかったとの回答は0.0%であった。

「非常に良かった」、「まあまあ」と回答した学生が92.0%だったことから、楽譜についての理解、認識を持つ良い機会となっていると考えられる。「非常に良かった」、「まあまあ」と回答した学生の自由記述（原文を記載）では、「楽譜を正しく理解する重要性を感じ努力できた」、「楽譜を読み込んだ」、「一つ一つの音を大切にした」、「強弱を意識した」の記述が多くみられた。アンサンブルや合唱の形態で出演した学生は、共同作業としての責任感を持つことでより深く読譜を行ったこともうかがわれた。「あまり」と回答した学生の自由記述では、「最初しか楽譜を見なかった」、「もともと結構読めるのであまり変わらなかった」などの記述がみられた。

(2)演奏のための知識や技能の向上について

「歌や楽器を演奏するために必要な知識や技能が身についたか」では、「非常に良かった」40.0%、「まあまあ」60.0%であり、「あまり」、「全く」との回答は0.0%であった。演奏のための知識や技術の向上は、全ての学生が出演形態によらないで、舞台発表を通して自分なりに何らかの気づきをもつことができたものと思われる。

「非常に良かった」の自由記述では、「表現をすること」などの表現の仕方に関する認識をもったという記述と、「強弱の意味」などの楽譜の理解についての記述が多かった。

「まあまあ」の自由記述では、「非常に」の記述と同様の傾向であるが、「リズム感がついた」、「強弱をつけることで表現がより伝わりやすくなるということがわかった」、「呼吸法やどうしたら大きな声・綺麗な高い声を出せるかを学んだ」などの記述がみられた。

本科の授業形態は、MLの集団授業であり個人で鍵盤楽器の練習をして発表をすることを基本としている。しかし、本取り組みを通して、発表するためにはどのように音楽を汲み取って表現したらよいかを学び、さらに聴衆側にたった意識を持つことができたと思われる。

(3)音楽の楽しさを味わったかについて

「出演したことで音楽の楽しさや喜びを味わったか」では、「非常に味わった」94.0%、「まあまあ」6.0%であり、「あまり」、「全く」の回答は0.0%であった。

出演者の多くが、出演したことで、音楽の楽しさや喜びを味わっていた。自由記述において、「歌っていて自分自身感動した」「みんなで一つになれた」「もっとバイオリンが好きになった」など、それぞれが曲に対する思い入れや、合唱では協同の喜びを感じながら音楽の楽しさを体感していたことがわかる。これは、1年生で出演した学生が、再び2年生で出演する学生も見られることにも現れている。

学生にとって成果発表は、充実感や楽しさを体感するとともに、感性を高める基礎的な資質の向上につながるものと思う。

(4)音楽関係の授業に役立ったかについて

「音楽関係の授業に役立ったか」では、「非常に役立った」28.0%、「まあまあ」68.0%、「あまり」

4.0%であり、「全く」の回答は0.0%であった。

「まあまあ」(68.0%)の回答率が極めて高く、「非常に役立った」(28.0%)、「あまり」(4.0%)の回答率から見ると、必ずしも音楽関係の授業に有益とは言えない。

しかし、出演することで「読譜力」、発声などの「技術力」、「音楽表現力」などの、音楽を学ぶ上での力がついたことや、「歌うことに積極的になり、弾き歌いに繋がったと思う」、「音楽の楽しさをさらに知れたので、前よりも興味が出た」、「楽譜の記号を読み取ることができるようになった」、「音楽を表現する仕方をいろいろと考えることによって、ピアノや幼児曲で役立つと思う」、「音符の長さなどがわかるようになった」、「楽譜を読んで音合わせをすることが多くなって音が少しわかるようになった」など、授業に役立ったと考える学生も見られた。

「技術力」や「表現力」についての気づきは、学生のピアノ経験によって受け止め方がさまざまであるが、自由記述による「今後、ピアノを弾くときに歌詞を感じることができると思う」、「ピアノでも楽譜をしっかり読み、正確に弾くようにしたいと感じた」、「歌でもピアノでも強弱の違いで雰囲気が変わっていくことを知り、もっと意識したいと思った」など、出演で体得したことを、授業に生かそうとして受け止めている。

(5)音楽的な表現力が身についたかについて

「音楽的な表現力が身についたか」では、「非常に身についた」32.0%、「まあまあ」68.0%であり、「あまり」、「全く」の回答は0.0%であった。

「表現」について学生はどのように受け止めているかここでは十分に読み取ることが困難であるが、学生の自由記述から見ると、「ただ歌うだけでなく出演する本人が楽しみ、他人に伝えたい何かを思うことが大切であると思った」、「曲の情景を思い浮かべながら表現できた」、「音を小さくするだけで優しさを表現できるわけでないように、表現方法にもいろいろあることがわかった」、「何回も練習するうちにやりたい音楽・表現がみえてきた」などの記述がみられた。

「まあまあ」(68.0%)の回答が多いことから、より表現力を高める必要を感じていることがうかがわれる。

通常の音楽授業の中では、ややもすると音楽性を重視することより技術面での達成度を評価する

傾向がある。学生にとっては、じっくりと時間をかけて音楽の表現方法を学ぶ有意義な場になったと考える。

(6)今後の音楽の授業への意欲がわいたかについて

「今後の音楽関係の学習に意欲がわいたか」では「非常にわいた」52.0%、「まあまあ」46.0%、「あまり」2.0%であり、「全く」との回答は0.0%であった。

出演したことで今後の音楽の学習に対して、非常に意欲のわいた学生は約半数である。楽しかったけれど非常に意欲がわいたとは言いがたい学生である「まあまあ」については、発表と音楽の学習との関連が十分に認識できていないと思われる。また「あまり」の自由記述からは、「仲間意識が深まった」ものの音楽の学習にはつながっていないことがうかがわれる。

(7)協調性が身についたかについて

「複数の学生と共演することで協調性が身についたか」では、「非常に身についた」73.3%、「まあまあ」23.7%、「あまり」2.0%、「全く」1.0%であった。

「非常に」、「まあまあ」と回答した自由記述から、「自分の意見を主張するだけでは上手いかわからない」などの記述が多く、学生音楽祭を通して意見交換や励まし合いを行って、友達関係などの協調性を体得している。

種目の形態によらないで、舞台発表の場を共有したことで、これまでにない人間関係を築くことができたと思われる。

(8)保育実践力が身についたか

「保育実践において必要な知識や技能が身についたか」では、「非常に身についた」22.2%、「まあまあ」77.8%であり、「あまり」、「全く」との回答は0.0%であった。

「まあまあ」(77.8%)身についたと感じている学生が最も多く、次いで「非常に身についた」(22.2%)であり、学生は保育実践力をもっと身に付けることが必要である。

音楽祭出演により学生の音楽的資質は、向上したことがうかがえたが、保育実践力につながる力がついたと考える学生が「非常に身についた」より「まあまあ身についた」と感じる学生が多かった。今後の指導において、さらに保育現場で必要

とされる実践力について学生指導の方法を検討することがのぞまれる。それは、自由記述の中に「いろいろな知識や技能がついたがどれも保育実践に役立つか自分でまだ分かっていない」とあることから、今回の出演が保育実践にどのように結びついていくのかのイメージが得られなかったことが要因と考えられる。しかし、「子ども達にみんなで歌うことの楽しさを教えてあげたい」とも感じていることから、学生たちが保育の現場で子ども達に音楽の楽しさを伝えたいという意欲を持つ動機付けになったと思われる。

(9) 今後、保育者として役に立つかについて

「将来保育者として役に立つと思うか」では、「非常に思う」60.0%、「まあまあ」38.0%、「あまり」2.0%であり、「全く」との回答は0.0%であった。

「非常に」、「まあまあ」と回答した学生が9割以上であり、ほとんどの学生が、保育者としては役に立つと感じている。それは、自由記述において「人前で何かをするという面では、舞台上で演奏できたことは良い経験であった」、「最後までみんなとやり遂げたことであきらめないことの大切さがすごく分かった」、「将来保育者になってもこの経験が役に立つと思う」、「子ども達に歌う楽しさを伝えることができる一つの機会になった」、「集団で動くことと繋がってくるので役に立った」、「人の前に立って何かをするには準備や練習は必要だということがよく分かった」などの記述から、実践力と保育者としての経験は異なるということであろう。

(10) 出演してよかったかについて

「出演してよかったと思うか」では、「非常に思う」100.0%であった。

全員の学生が出演したことを「よかった」と答えている。受け止め方はそれぞれであると思われるが、自分自身を表現する良い経験であったと思われる。

5. 総合考察

本調査は、(1)「読譜力の向上」、(2)「知識や技能の習得」、(3)「音楽の楽しさの受容」、(4)「音楽関係の授業」、(5)「表現力」、(6)「今後の音楽学習の取り組み」設問から、基礎技能音楽で感性と技術力の習得を、学生がどのように受け止めたかを調査したも

のである。

本調査で見える限りでは、「発表をしてみようかな」の第一段階の動機、「発表する」の第二段階の意欲、第三段階の「発表」を学生が自身や友だち、教員との関わりを通して、どのようなことに「気づき」を持つことができたかが筆者たちの意図する内容である。

入学時に音楽経験の異なる学生が、約半年をかけて音楽を創り、本番を経験して、人間関係、練習の苦しさを乗り越えて発表直後は感動にあふれている。単に楽しかった、感動したにとどまらないで、時間の経過とともに拍手を受けた喜びが保育者として子どもと共有することの喜びを認識する第一歩でありたい。

アンケート質問項目の(1)、(2)、(3)、(5)は、『幼稚園教育要領』の内容および内容の取り扱い、『保育所保育指針』の内容を基盤とし、厚生労働省からの「指定保育士養成施設の指定および運営の基準について」の通知を考慮して構成したものである。これらの設問に対して、(1)92.0%、(2)100.0%、(3)100.0%、(5)100.0%の学生が、「非常に分かった」もしくは「まあまあ」と受け止めていることから、学生音楽祭は、学生のモチベーションや音楽に対する表現力を高めるだけでなく、保育者養成の現場で必ず身につけなければいけない、保育者としての資質をも向上させる、大変有意義な行事であるに違いない。

6. まとめ

保育者に必要とする豊かな感性を育むためには、自らの心と身体をやわらかくし、表現への気づきをもつことが必要とされる。

音楽の基礎力として、鍵盤楽器学習は単に技術の習得ではなく、演奏に対する表現の意識を高め、楽譜に書かれた音を、音楽表現の音としての意識をもって弾く・うたうという認識が大切である。しかし、個人で練習する時には、とにかく早く弾けるようになりたいという気持ちが先立ち、弾くという作業的な動作にとどまっているように見受けられる。

そこで、学生が発表を通して企画力や人間関係力を育み、保育者としての実践力を身につける学生音楽祭は、調査結果から見ると、出演してよかった、音楽の楽しさを味わうことができたと感じている学生が非常に多い。発表までの約半年間、音楽と向き合う主観性と、第三者を意識した客観性をもちつつ、さらに運営などの人間関係を築くことも求められ

る。

本調査結果から、学生音楽祭を通して、音楽を第三者に伝えようという意識を持つ気づきを感じた学生は多い。

また、学生と音楽教員とのコミュニケーションでは、ともすればピアノの先生は怖い、厳しいと学生は思いがちであるが、学生音楽祭を通して音楽教員を身近に感じていることは、きわめて重要な要素である。

音楽教員相互の連携では、専任教員と非常勤講師が、指導上の情報を共有しあって人間関係を深めていると思われる。

出演学生は発表を通して音楽の楽しさや喜びを感じ、楽譜を読み取るという基本的なことに気づき、音楽を受容して身体で受け止める表現発表を身近に感じ、意識をやわらげることができていると考えられる。しかし、卒業後の保育実践力に必要な知識や技能の向上という観点では、出演学生は十分に実践力が身についたとは思っていないものの、まあまあ身についたと受けとめている者が多い。本調査結果において、まあまあの回答は本項目が最も高く、楽しい、協調性が身についたにとどまらないで、事前・事後のガイダンスにおいて保育実践現場にどのように位置づけて行くことが好ましいか指導が必要であることがわかった。

基礎技能としての音楽の目指すねらいの成果は見られたが、学生音楽祭後は、後期試験の準備となる。2年間という限られた期間において発表の経験で体得した音楽の楽しさや知識を感じて実技試験に臨んでほしいと筆者たちは考えるが、ある意味では、この経験が音楽のスタートとも言えるかもしれない。

音楽を楽しむことは容易であるが、筆者たちは、子どもの感性を育むことを意識して自身の音楽観を確立し、客観的に音楽をとらえることができる学生の育成と授業を検証することに努めていきたい。

本稿は、日本音楽教育学会第40回大会において口頭発表した内容をまとめたものである。